

# 第二次朝集殿院南門の調査

## —第326次

### 1 はじめに

2001年度末に行った第326次調査（第二次朝集殿院南門）の報告である。調査面積1020㎡。2002年1月8日から4月12日まで調査を行った。詳しい調査目的や概要は『紀要2002』を参照されたい。主な調査目的は、「院の南門・南面区画施設の有無」「門北側（院南辺）の様相」および「新旧2時期の遺構の有無」を把握することだった（図119）。調査の結果、南門や門に取り付く区画施設などの遺構を確認し、朝集殿院地区の様相に関して新たな知見が得られたので、以下に報告する。

### 2 地形と基本層序

調査前の現地形は、基本的に南下がりの地形である。門・築地塀推定部分は、盛土・張り芝で遺構標示が行われ、雨水の排水処理のために、基壇部分にはコンクリート製暗渠が開削されていた。

調査区の基本層序は、上から順に、整備盛土、床土（灰白色土または黄色土）、中近世の遺物包含層（灰褐色土）、平城京廃絶後の崩壊土とみられる礫敷土（礫混じり褐色土）と続き、奈良時代の整地土である暗褐色土となる。

整地土の下は、地山（暗灰褐色～橙灰色砂）のほか、調査区南半で弥生時代前期の生活面（暗橙褐色～黒褐色粘質土）を確認した。遺構検出面の標高は63.8m～64.1mである。

### 3 検出遺構

奈良時代の整地土上面および地山上面で主な遺構を検出した。検出遺構は、弥生時代前期の土坑3基および溝1条、古墳時代の土坑1基、奈良時代の朝集殿院南門、掘立柱塀2条、溝10条、足場穴、柱穴列2条などである（図121）。このほか、中近世の耕作溝、近現代のコンク

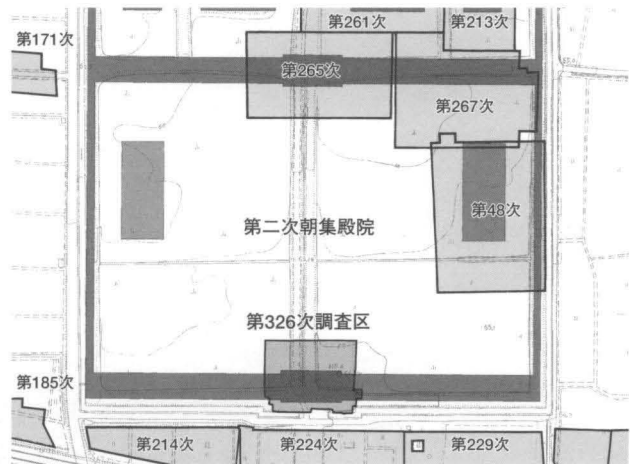


図119 第326次調査区位置図 1:3000

リート暗渠や素掘溝などの排水施設、まとまらない小穴などが多数存在する。以下では、主な遺構のみ解説する。

#### 平城京造営前の遺構

SK18360 調査区東部の断割調査で確認した弥生時代前期の土坑。長辺約1m×短辺約70cmの楕円形で、深さは検出面から20cm余りである。埋土に、弥生時代前期の土器片（図127-1）を包含する。

SK18365 調査区西部の断割調査でみつかった古墳時代の土坑状落ち込みである。古墳時代の須恵器甕（図127-2）が出土した。

#### 奈良時代前半の遺構

SB18400 第二次朝集殿院南門。後世の削平により、基壇上面は大きく削平されており、基壇南端部は調査区外にあって確認できなかった。基壇に伴う遺構には、掘込地業、地覆石据付痕跡、足場穴がある。地覆石据付痕跡から、基壇規模は東西26.2m、南北13m以上となり、基準尺1尺=0.2954mではおよそ東西89尺、南北45尺以上となる。建設当初は東西に掘立柱塀が取り付け、のちに築地塀に改作されたと考えられるが、今回、南面築地塀の痕跡は検出できなかった。基壇中央の断割調査では、礎石据付の根石痕跡や掘立柱の痕跡は確認できなかったものの、建設当初の閉塞施設は掘立柱で、門自体は礎石

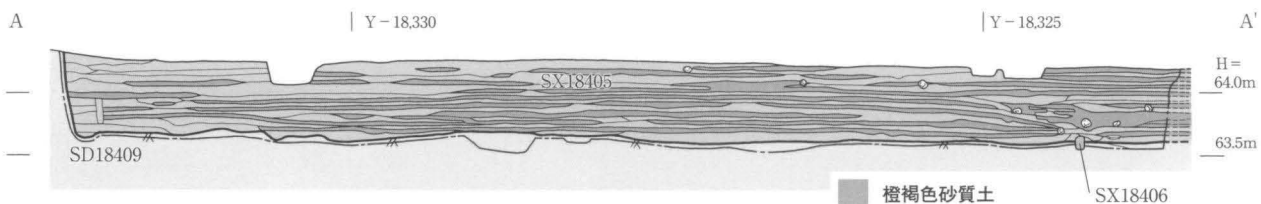


図120 SB18400基壇（西半）東西断面図 (X=-145.875.0) 1:60

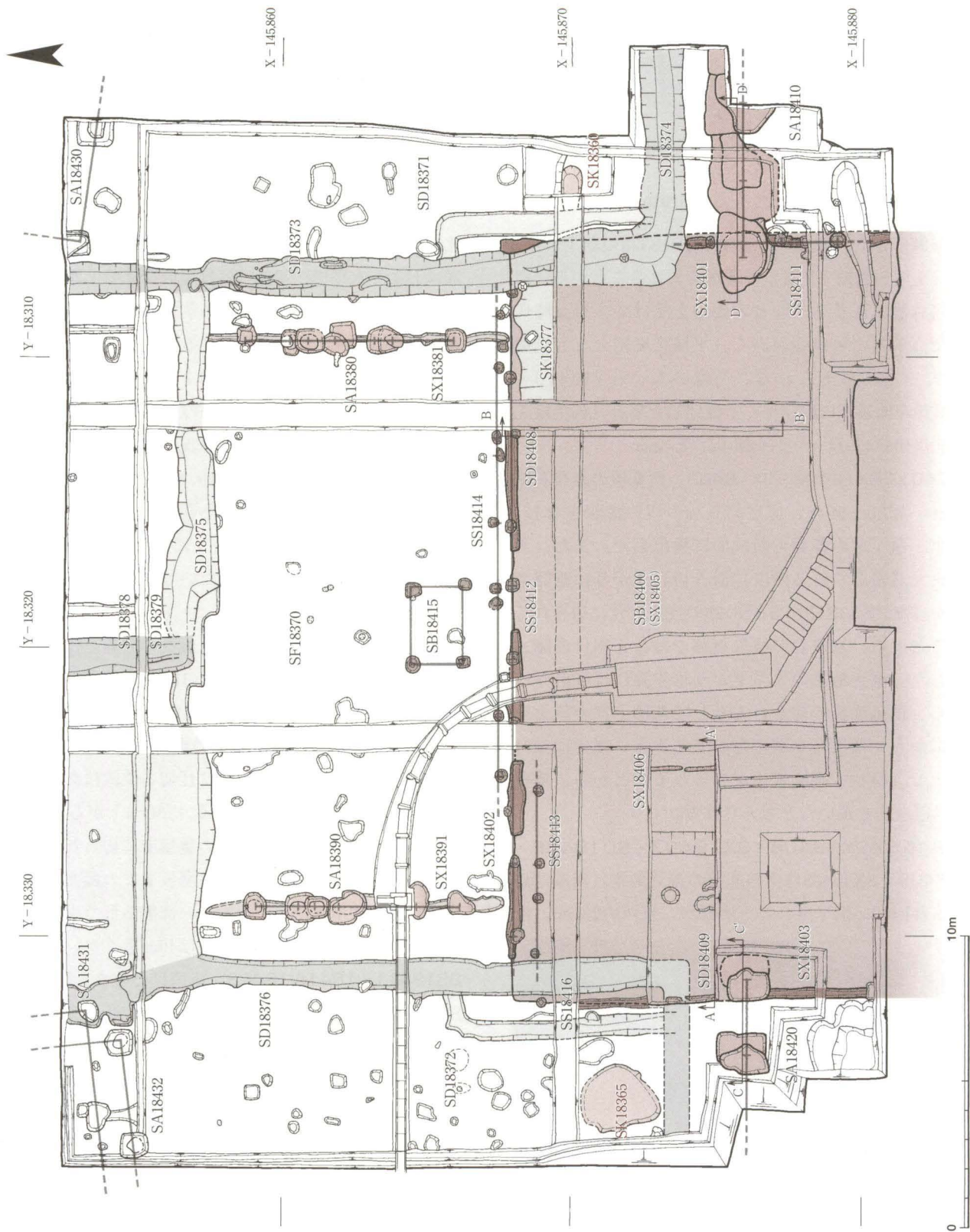


図121 第326次調査遺構平面図 (近現代の遺構は一部省略) 1 : 200

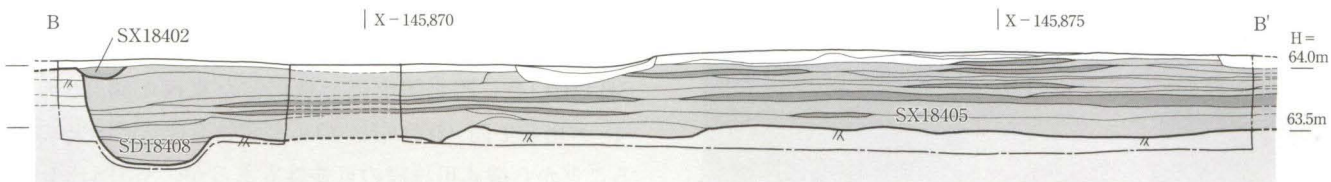


図122 SB18400基壇 (北半) 南北断面図 (Y=-18,313.5) 1 : 60

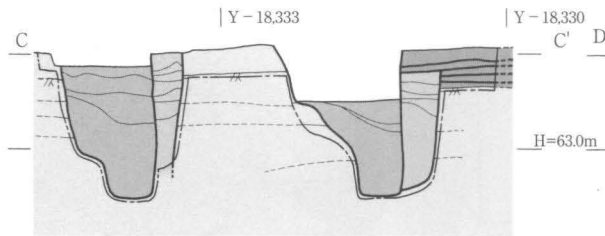


図123 SA18420柱穴断面図 (X=-145,876.0) 1:80

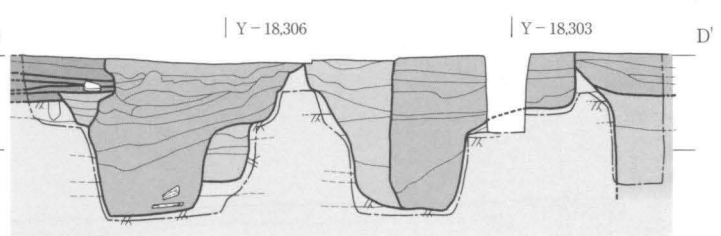
建と推測できる。また、近接するSD18373の埋土には、平城宮Ⅰ期・Ⅲ期・Ⅴ期の軒瓦が含まれることから、門や閉塞施設は瓦葺替えなどの改修を受けて、奈良時代末まで存続した可能性が高く、平城宮廃絶とともに機能を失ったと考えられる。ちなみに、SA18410・SA18420が棟通りに取り付くと仮定した場合、朝集殿院の南北規模は439尺(1尺=0.2954m)となる。

**SX18401・SX18402・SX18403** 門基壇の地覆石据付痕跡。幅30~50cm、深さ約5cmの浅い溝状をなし、門の東・西・北の各面で断続的に検出した。また、北面中央で通常みられる階段に沿う折れ曲がり確認できなかった。SA18410・SA18420の柱抜取穴に切られていることから、地覆石の抜取痕跡ではなく据付痕跡と解釈した。掘込地業の立ち上がり境界線にほぼ沿うことから、掘込地業の端を目安として基壇上部の積土を行ってから、地覆石を据えたのであろう。埋土は橙白色粘土で、粉状の凝灰岩片が含まれることから、地覆石には凝灰岩を用いたと考えられる。

**SX18405・SX18406・SX18407・SD18408・SD18409** SX18405は南門基壇の掘込地業。南端は地覆石痕跡同様、削平されて不明だが、東西約26.6m、南



図125 SA18420・SX18403・SX18405 (南西から)



■ 地業版築土 ■ 掘形埋土 ■ 抜取埋土

図124 SA18410柱穴断面図 (X=-145,875.7) 1:80

北13m以上の規模をもつ。深さは遺構検出面から60cm弱、底はおよそ水平で、端部はほぼ垂直に立ち上がる。ただし北端部の底は幅約80cm、深さ約20cmの東西溝状に一段深い(SD18408)。これは版築する際に水を集積した排水溝の可能性もある。同様の遺構を地業西端でも一部検出した(SD18409)。またSD18409の上面では、幅30~40cmの範囲で小石が密に埋まった状況を観察した。

版築の様子は、最下層に暗灰褐色粘質土(厚さ10~15cm)を敷いた後、橙褐色砂質土(厚さ3~5cm)と暗茶褐色粘質土(厚さ5~10cm)を交互にたたきしめる(図120, 122)。断割調査では、土をたたいて凹んだ版築棒の痕跡も平面的に確認した。

今回の大きな発見としては、版築の区画を仕切る堰板痕跡SX18406が挙げられる。SX18406は地業の西端から約8.3m(28尺)東で、南北に走る幅約10cm、深さ約15cmの溝状遺構である。掘込地業の東西幅が約90尺なので、堰板は地業をおよそ3分の1に仕切る位置にある。版築土にはSX18406の西側で斜めに約30cm上がる境目があり、西側の版築土東端が東側の版築土に切られる。このことから、まず基壇の西端から堰板までの範囲で版築を積み、その後積んだ土の東端を一部削る形で東側を積んだことがわかった。堰板の高さは40cm近くか。

**SS18411~18414, 18416** 南門にともなう足場穴列。SS18411は基壇東面地覆石痕跡SX18401上、SS18412は基壇北面SX18402上、SS18416は基壇西面SX18403上、SS18413は基壇北面内部、SS18414は基壇北面外部の足場穴である。径は30~45cm、深さは30~50cm、柱間は1.2~2.5mといずれも不規則である。SS18411とSS18412は地覆石据付痕跡を切ることから、解体時の足場穴と考えられる。一方、SS18414の柱抜取穴からは平城宮Ⅰ期の軒平瓦6664Cが出土した。ところで、SS18413は基壇縁から80~90cm内側にあるが、それより内側では足場穴は検出していない。これは、SS18413付近で基壇内外に高低差があった可能性を示唆している。

**SB18415** 門北側中央で検出した東西1間(柱間9尺)×南北1間(柱間6尺)の小型建物遺構。門中央にあることから儀式用施設の可能性もあるが、SS18412の柱穴2基と柱筋を揃えることから、解体時足場の踊り場の

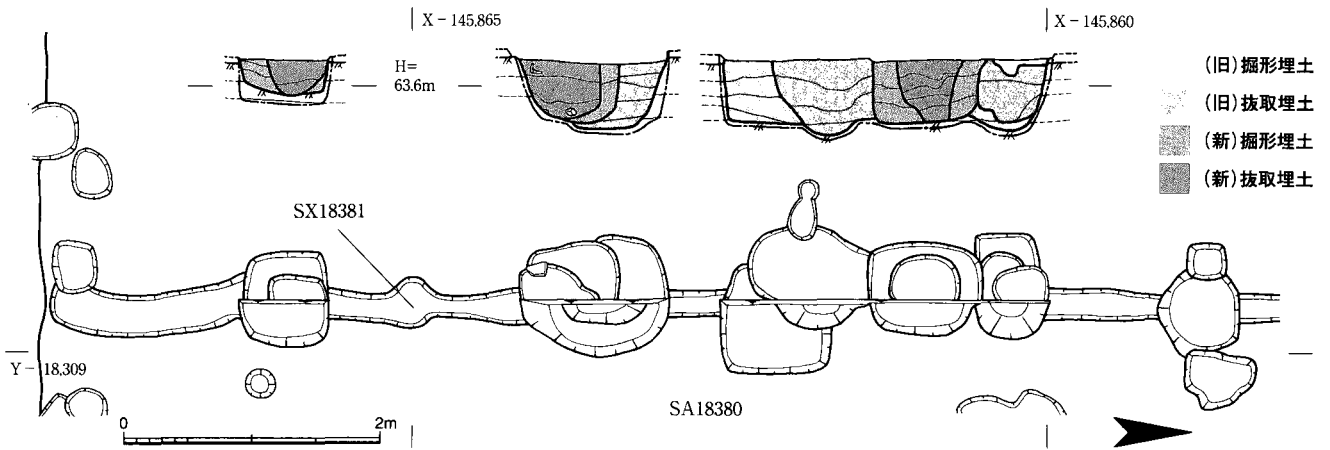


図126 SA18380・SX18381 平面図・断面図 (Y=-18,309.4) 1:60

可能性もある。

**SA18410・SA18420** SA18410は門東側、SA18420は門西側に取り付く東西掘立柱塀である。柱間はいずれも9尺で、本調査ではSA18410は柱穴4基、SA18420は柱穴2基を確認したが、ともに発掘区外に続く。SA18410の柱穴は検出面から1.5~1.7mの深さがあり、掘形は下部で径約1.2mの規模を持つ。抜取穴はすり鉢状に拡大し、検出面では、短径約1.4m~長径約2.3mの東西に長い不整形な楕円形を呈する。SA18420の柱穴は掘形が東西約1m×南北1.4~1.7mの隅丸長方形で、深さ1.2~1.5mである。抜取穴は下部が柱痕跡状だが、検出面では長径1.2~1.6m×短径1.0~1.1mの南北に長い楕円形を呈する。SA18410、SA18420はともに、基壇に最も近い柱穴は地覆石据付痕跡よりも基壇内側に寄る形で検出した。つまり、断面観察から基壇縁より約2.5尺内側に柱が立つことが分かる。また、柱痕跡状の抜取穴から基壇北縁までは約27尺を測ることから、掘立柱塀が門の棟通りに取り付くとすると南北基壇長が54尺で、南端から南北幅約10尺削平されたと推測できる。

さらに特筆すべきは、最も基壇寄りの柱掘形が、基壇掘込地業の版築土を1~3層積んだ後に掘削され、柱を立てて柱穴を埋めた後、柱穴上面に版築土がさらに積まれた点である(図123, 124)。同様の仕様は、掘込地業ではないが、第二次朝堂院の東第二堂下層建物SB12930などでも観察されている。

**SF18370・SD18371・SD18372** SF18370はSB18400の北側に延びる南北道路で、礫敷などの舗装は残存しない。東側溝SD18371と西側溝SD18372は、北から南に流れ、門東北部・西北部のX-145,866付近で基壇を避けて鍵の手に曲がり、SA18410・SA18420の北で東西に折れて調査区外に逃げる素掘溝。ただし、後のSD18373・SD18374とSD18376に改作されたため、鍵の手に屈曲する部分(幅70~80cm、深さ約10cm)のみ検出した。SD18373とSD18376の溝心心距離は約24mである。

**SD18375** 門基壇北縁から約11m北にある素掘りの東西溝。西より東が低く、中央部でSD18378・18379が流れ込み、東はSD18371、西はSD18372と繋がる。東半は幅80~180cm、深さ約10cmだが、西半は北からの水が溢れて氾濫した状態を検出した。瓦では軒丸瓦6225Lや軒平瓦6663・6721Cが出土しており、SA18380・SA18390の北を限る溝として同時期に開削され、奈良時代を通じて存続したと推測する。

**SA18380・SA18390** SF18370上のSB18400とSD18375に挟まれる範囲に東西対で存在する南北柱穴列。東のSA18380はSD18373の西約2.2mの位置で、一部重複しつつ不揃いな柱間間隔で掘立柱穴が7基並び(図126)、西のSA18390はSD18376の東約2.2mの位置で、一部重複しつつ7基並ぶ。SA18380とSA18390の心心距離は約19.6mで、これは北方の第二次朝堂院南門の南側でみつかった儀式用の旗竿遺構SA17008・SA17009の心心距離と等しい。検出状況からも、SA18380・SA18390は旗竿を立てた跡とみなせ、少なくとも2時期以上の重複があるろう。

**SX18381・SX18391** SX18381はSA18380に、SX18391はSA18390にそれぞれ切られる南北溝状遺構で、幅20~30cm、深さ約5cmでSD18373・SD18376にほぼ平行し、SB18400とSD18375の間で終焉する。旗竿をたてる際の目印として掘削された溝と推測する。

**SA18430・SA18431・SA18432** SA18430は東北隅にある東西2基(柱間13尺)、SA18431は西北隅の東西2基(柱間12尺)、SA18432はSA18431の南西にある東西2基(柱間12尺)の柱穴列である。いずれも東西柱穴2基のみで、他に関係する柱穴は検出できなかった。ただし、院内で道路に直交する塀が多数存在するのは考え難く、調査区外で建物遺構になる可能性もある。

#### 平城京廃絶後の遺構

**SD18373・SD18374・SD18376** SD18371・SD18372を改作した素掘溝。基壇東北部・西北部で鍵の

手に曲がらずに基壇隅を破壊してL字に屈曲し、閉塞施設北で東西に逃げる。SD18373・SD18374の埋土は上層が黄灰色粘質土、下層が灰色砂質土と大きく2層に分かれる。SD18373の埋土には平城宮Ⅲ期の6225A-6663Cが多く出土し、平城宮Ⅴ期(奈良時代末)の6133Dbも含まれることから、埋没したのは奈良時代末以降と考えられる。

SK18377 門基壇東北部で基壇土を壊す東西溝状遺構。東はSD18373と接続する。

SD18378・SD18379 SF18370上中央でSD18375に北から流入する素掘南北溝。西側のSD18378が掘削された後、ほぼ同じ位置でSD18379に改作されている。

#### 4 考 察

遺構の検出状況から、SB18400の規模について復原を試みる。SA18410・SA18420と地覆石痕跡との関係が重要である。SA18410・SA18420が門棟通りに接続すると仮定した場合、柱穴列心と基壇北縁までの距離が27尺であるから、基壇規模は東西89尺×南北54尺となる。この規模は朱雀門、第一次大極殿院南門に次ぐ大きさであり、桁行5間門と想定できる。梁行規模は後者とほぼ等しいことから、SB18400でも『平城報告Ⅺ』や『年報1994』で提示された第一次大極殿院南門復原案と同様、梁行2間と梁行3間の2通りが可能である(図128)。

梁行3間の場合、掘立柱が接続するのは北から3本目の東西柱筋と棟通りの両方があり得る。前者では、基壇の出を7尺とすると梁行柱間は10尺で梁行全長が44尺となる。今回の基壇規模は45尺以上と判明したことから、後者が妥当である。棟通り接続の場合、東西89尺×南北54尺であることから、基壇の出が7.5尺で、桁行5間(13尺+16尺×3+13尺)、梁行3間(13尺×3)に規模が復原できる。上部構造は不明だが、第一次大極殿院100分の1復原模型の南門に類似した二重門となるか。

梁行2間の場合、梁行柱間は基壇の出を8尺とすると梁行2間(19尺×2)、7尺とすると梁行2間(20尺×2)となる。階段痕跡が不明だが、螻羽の出を7尺とすると桁行5間(15尺×5)に復原できる。しかし、第一次大極殿院南門はともかくとして、第二次朝集殿院南門で果たしてこれだけの規模を有したか。また、北面

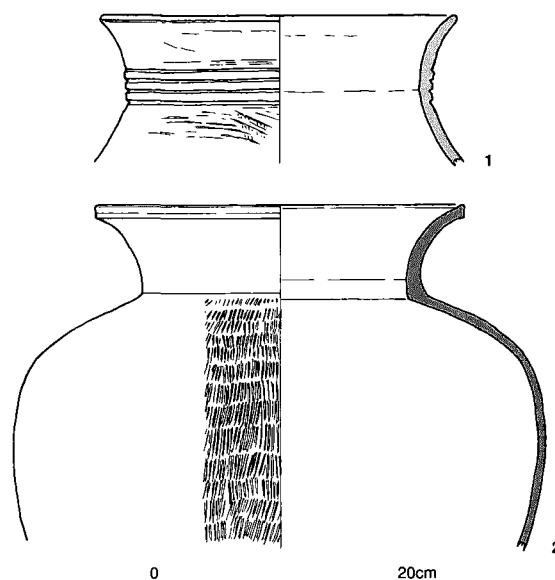


図127 第326次調査 出土土器 1:6  
(1:SK18360より 2:SK18365より)

階段痕跡がない点、掘立柱塀が約3尺基壇内部に食い込む点、基壇内部足場穴から推測される基壇内部の高低差などが問題として残る。これらの問題の解決案として、ここでは二重基壇案を提示しておく。

二重基壇だが、足場穴の検出状況から下成基壇は成の低い犬走り状基壇がふさわしい。掘立柱塀柱穴や北面階段はこの犬走り内でおさまると考えられ、下成基壇の出は3尺以上となる。仮に下成基壇の出を4尺とすると、上成基壇の規模は東西81尺×南北46尺となる。この場合、建物が立つ上成基壇では基壇桁行の出を8尺、螻羽の出を5尺とすると、桁行5間(13尺+15尺×3+13尺)、梁間2間(15尺×2)の門が想定できる。

このように、複数の復原案を考えることは可能である。たしかに、閉塞施設が柱間9尺の掘立柱塀と藤原宮に類似した古い要素を持つことから、平城宮でまだ確認されていないが梁行3間門の可能性はある。また、第一次大極殿院南門のように、梁行20尺と復原できるかもしれないが、二重基壇の可能性も否定できない。それぞれに一長一短があり、現段階で、どの案が最も可能性があるかを定めることはできない。

#### 5 出土遺物

瓦磚類 出土点数が多いのは平城宮Ⅲ期の6225-6663の組み合わせで、軒丸瓦6225が12点、軒平瓦6663が17点出土した。このうち、北から流れてくるSD18373・SD18376から出土したものが16点ある。朝集殿所用の瓦も一部含

表18 第326次調査 出土瓦磚類集計表

| 軒丸瓦  |         |          | 軒平瓦    |        |            |
|------|---------|----------|--------|--------|------------|
| 型式   | 種       | 点数       | 型式     | 種      | 点数         |
| 6133 | D       | 3        | 6641   | C      | 1          |
|      | M       | 1        | 6643   | C      | 2          |
|      | ?       | 4        |        | ?      | 1          |
| 6134 | A       | 1        | 6663   | C      | 10         |
| 6225 | A       | 2        |        | H      | 1          |
|      | C       | 1        |        | ?      | 6          |
|      | L       | 2        | 6664   | C      | 9          |
|      | ?       | 7        |        | F      | 1          |
| 6273 | ?       | 1        |        | ?      | 3          |
| 6282 | A       | 1        | 6668   | A      | 7          |
| 6284 | C       | 3        | 6685   | B      | 1          |
|      | Ea      | 3        | 6721   | C      | 8          |
|      | ?       | 2        |        | F      | 1          |
| 7247 | A       | 1        |        | ?      | 4          |
| 型式不明 |         | 41       | 型式不明   |        | 12         |
| 軒丸瓦計 |         | 73       | 軒平瓦計   |        | 67         |
|      | 丸瓦      | 平瓦       | 磚      | 凝灰岩    | 道具瓦        |
| 重量   | 410.8kg | 1020.4kg | 12.1kg | 93.3kg | 鬼瓦 4 炭斗瓦 4 |
| 点数   | 4541    | 12096    | 12     | 43     | 面戸瓦 11     |

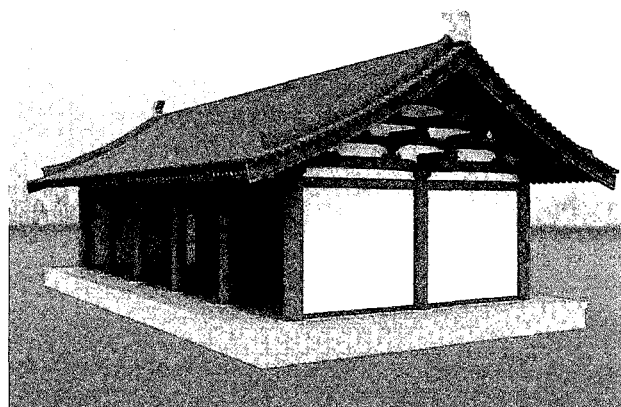


図128 第一次大極殿院南門 想像パース  
(梁行2間、四重虹梁案。(財)文化財建造物保存技術協会蔵)

まれるが、大部分は礎石建物の朝集殿院南門および上層の南面築地塀に伴うと考えてよいだろう。

次に多いものは、平城宮Ⅰ期の瓦である6284-6664の組み合わせで、軒丸瓦6284が8点、軒平瓦6664が13点出土した。このうち、SD18373・SD18376出土のものが8点あるが、それ以外は、調査区北半の包含層から出土しており、出方は一様ではない。このことから、建設当初のSB18400およびSA18410・SA18420と、この軒瓦の組み合わせが直接関係するとは言い難い。

では、建設当初のSB18400およびSA18410・SA18420がどの時期まで遡れるのか。第二次朝堂院南門東方の第267次調査の所見では、朝集殿院東北部にある上層の朝堂院南門や南面築地塀で、平城宮Ⅱ期前半の6311A・B-6664D・Fの組み合わせが葺かれていたとする。しかし、本調査ではこれらの組み合わせが出土しなかったことから、現段階では朝集殿院東北部の時期との符合も困難であった。(平澤麻衣子)

土器・土製品 整理用コンテナにして7箱分の土製品が出土している。それには弥生土器、埴輪、古代の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが含まれるが、平城宮自体に関わるもののほとんどが南門廃絶後の礫敷土(礫混じり褐色土)より出土するもので、多くが細片で図化できるものは少ない。須恵器すり鉢、杯蓋などが目に付く程度である。

特筆すべきは、朝集殿院下層の遺物であり、図127には弥生土器と須恵器を示した。1は大型の弥生土器壺で、土坑SK18360から出土した。頸部は削り出し突帯、4条のヘラ描き沈線が施されている。畿内第一様式新段階に下るものであろう。このほか、調査区西端でもL字状の口縁をもつ甕が出土している。これらは第224次調査で、

壬生門北側の調査の際に出土した弥生土器と関連し、一帯が弥生時代前期の遺跡であったことがわかる。

2は、調査区西端で土坑状の落ち込みSK18365から出土した須恵器甕である。外面と口縁内面に自然釉がよく付着している。内面はタタキの当具痕が見えず、丁寧に撫でてある。おそらく古墳時代のものと見てよい。下半を欠損した状態で単独で出土した。(高橋克壽)

## 6 まとめ

今回、第二次朝集殿院南門と門に接続する東西掘立柱塀の存在を明らかにしたことは大きな成果である。特に、掘立柱塀と門基壇掘込地業との関係は、朝堂下層建物の建設手法との関連を示唆するものであった。しかし、SB18400およびSA18410・SA18420の建設時期や上層築地塀の存在は把握できなかったことから、朝集殿院がいつ造られてどの範囲に及ぶかは、今後解明すべき課題となった。また、SB18400の規模や構造についても1案に決められなかったので複数の案を提示するにとどめた。

ところで、門北側にある儀式用の旗竿痕跡も特筆すべき発見である。これは第二次朝堂院南門の南にある旗竿遺構の延長上に位置し、密接な関係性が窺えた。第二次朝集殿院南門は、平安宮ではその位置は応天門にあたる。旗竿は、門の南側に立てるのが慣例であるが、『儀式』や『延喜式』には、平安宮応天門では外国使節が元旦朝賀に参列する際、特別に門の北側にも武官が隊列し、旗竿を立てたとされる。今回みつかった旗竿遺構がこの史料と関係があるかは速断できないが、平安宮における儀式との関係や、朝集殿院内の使われ方などを考察する上で重要な遺構である。以上の課題もあわせて、今後の朝集殿院内の調査に期待する。(平澤麻衣子)